巻頭言

総合文化研究所長　松浦寿夫

今年度も多くの研究所所員の先生方のご援助で様々な企画を実現できたことを改めて感謝の意とともにご報告しておきたい。また、筆者自身が昨年度構想し、本誌前号のこの場で予告した企画を残念ながら実現できなかったことを深くお詫び申し上げたいと思う。予想外の業務に多くの時間を割かざるをえなかったという事情はあるにせよ、所長としての任期を終えるにあたって大きな悔恨を残すことになってしまったが、来年度以後に、一所員としてその一部でも実現できるよう努力したいと思う。

また、私事にわたるが、筆者の友人たちによって形成された芸術教育の場が閉鎖の危機に晒されるなか、その側面的な支援を通して、思考のインフラストラクチャーの構築という課題に直面することになった。たとえば、かつてのフランス語講読の教室では必ずといってよいほど取り上げられた作品のひとつに、ポール・エリュアールの詩、「自由」がある。「僕は書く　君の名前を」を最終行とする四行のブロックが二十回以上にわたって反復されるこの作品は、最終行で君と呼ばれる対象の名前が自由という語であることが判明するにいたって、文学史的な記述を援用すれば、恋愛詩の形式を採用した抵抗の戦線を構築する詩であるということになるが、何よりも注目すべき点は、各ブロックの残りの三行が、名前の表記の場の列挙であることだ。しかも、この表記可能な場所は読者による変形と追加に無際限に開かれているという意味で、読者は自らの手で、この表記の場をさらに拡張することを要請されているかのようですらある。その意味で、「詩は万人によって書かれなければならない」というロートレアモン的な信条の具体的な実現であるこの作品は、小さな、そして可塑性に開かれたインフラを構築したといえるかもしれない。

本号の特集名となった「感覚の組織化」という語は、いうまでもなく、セザンヌの「組織化された感覚の論理」という語を喚起するものだが、このセザンヌの表現もまた、自らに襲いかかってくる感覚の混乱状態への対処として生産されたインフラであったといえるはずだ。